

日本学 術会議 <h1>中国・四国地区ニュース</h1>	No. 41 2010. 3	発行 日本学術会議 中国・四国地区会議
---------------------------------	-------------------	---------------------------

記 事	頁
学術会議地区活動について	1
スーパー高専の船出	2
社会学と社会調査	4
公開学術講演会について	7
会員・連携会員一覧（中国・四国地区）	9
地区会議事務局からのお知らせ	10

## 学術会議地区活動について

日本学術会議中国・四国地区会議 代表幹事  
第3部会員（高知工科大学学長）

佐久間 健人

前回の地区活動についてのご報告に引き続き、その後の活動状況をご報告いたします。

平成 21 年 3 月 9 日に広島大学において科学者懇談会を開催いたしました。当日は、広島大学関係者の方々のご尽力により、鈴木興太郎副会長をお迎えして懇談いたしました。中国・四国地区会議の会員の方々からは、地区活動の重要性に関するさまざまな意見が出されました。鈴木副会長には、これらの意見に対して日本学術会議としての立場をふまえて大変誠実にご回答いただきました。この懇談会が、将来中国・四国地区の存在感を増すうえで有益なものであったと理解しています。

また、平成 21 年 7 月 11 日には、徳島大学において、「医学と社会の接点—難病に立ち向かう生命科学の創造と魅力」と題して公開講演会を開催しました。この講演会は徳島大学の曾根三郎教授のご尽力で実施されたものであり、日本学術会議金澤一郎会長

をはじめ、徳島大学の医学部及び薬学部の先生方によって生命科学に関わる多くの課題が取り上げられました。この講演会には、生命科学分野を志望する徳島県の高校生が参加するとともに、その代表が司会進行役を務めるというユニークな試みがなされました。若い高校生の参加者にも生命科学の魅力が伝わったものと思われま

す。今年度の活動としては、平成 22 年 3 月 8 日 (月) 広島市内において運営協議会を開催する予定にしております。また、平成 22 年度の学術講演会を平成 22 年 11 月 27 日 (土) に宇部市において、山口大学のお世話で開催することになっております。多くの方々のご参加を期待いたします。

## スーパー高専の船出

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員  
第三部会員 (香川高等専門学校 校長)

嘉門 雅史

国立高等専門学校は、中学校卒業を受け入れ、時代の要請に対応した実践的技術者を養成することを目的として、昭和 37 年に創設された 5 年制の高等教育機関です。発足時には 12 校が全国に配されましたが、順次その数が増加して 55 校に達しており、平成 16 年度の国立高等教育機関の改正の際には、全ての国立高等専門学校が単一の独立行政法人として国立高等専門学校機構に組み入れられています。中学校卒業後の早い時期から 5 年一貫の専門教育によって独創性に富んだ実践的技術者を世に送り出してきました。また、近年の高度教育の要請に基づいて、平成 3 年からは、さらに 2 年間の専攻科が創設され、より高度な知識や技術を学んで大学評価・学位授与機構の審査を経た後、「学士(工学)」の学位を取得できるようになりました。高専における高度実践技術者教育は、戦後の各種職業教育の中で最優秀のものとして評価されており、特に OECD の高等教育機関評価や中央教育審議会が高く評価されています。ここ数年の社会経済情勢の低迷による就職冬の時代が続いていますが、高専は 10 倍以上の有効求人倍率を保持しています。

したがって、高専生は大学入学のための受験勉強の拘束から解放されて、勉学だけでなく課外活動にも集中的に打ち込むことができるユニークな組織といえます。一般教育と、専門の理論と実践的技術を融合したカリキュラムにより、本科の 5 年間の内

に大学とほぼ同程度の実力を身に付けることができます。さらに専攻科では卒業研究をより深化させて、充実した特別研究に取り組むことが可能になっています。しかしながら、わが国の社会情勢として少子化の影響は高専教育でも避けがたく、入り口としての新入生の確保は極めて重要な課題となっており、中学生人口の激減と理数科離れの進展が受験者数の低下に繋がり、結果としての学力低下の防止に腐心を迫られている状況です。

このような情勢の中で、高等専門学校教育のミッションも近年大きく変化し、より高等教育の性格が支配的になっていることや、社会経済情勢の変化による国の財政の逼迫によって限られた資源の下で、より高度な教育研究の遂行が求められるようになってきました。そこで独立行政法人国立高等専門学校機構では平成 21 年度からの第 2 期中期目標中期計画の目玉として、平成 21 年 10 月 1 日に高専の高度化教育をより進展させることを目的として、全国 4 地区（宮城、富山、香川、熊本）の 2 つずつの高専を再編統合して新しいモデルのスーパー高専とすることになり、専攻科を充実するとともに、本科の学生定員の減少による改組を行いました。中国・四国地区では、このほど香川高等専門学校が誕生いたしました。すなわち、香川県内の二つの高専であった高松工業高等専門学校と詫間電波工業高等専門学校とが「香川高等専門学校」として統合され、本科（7 学科）、専攻科（2 専攻）、地域人材開発本部（2 センター）を有する新高専が誕生したものです。香川高専では教育研究施設・設備の整備および充実を図り、高松、詫間両キャンパス間の連携を強化することで、魅力的な教育環境を提供します。特に、一般教育と専門教育をバランスよく行い、科学技術の急速な進展に対応できる能力を備え、豊かな人間性と広い視野を持った「知と技と心の調和のとれた創造性豊かな高度実践技術者」の養成に専心取り組んでいるところです。

高松工業高等専門学校は、先に述べました昭和 37 年に創立された国立高等専門学校として全国で最初に作られた 12 校の一期校の内の一つであり、当時の時代背景を反映した実践技術者の養成を目的として、幅広い工学系分野における人材作りの輝かしい教育実績を有しています。一方、詫間電波工業高等専門学校は昭和 18 年に大阪に作られた官立の無線電信講習所を母体とし、昭和 24 年に現在の詫間町香田の地へ移転して、同年に詫間電波高等学校と改名され、昭和 46 年に詫間電波工業高等専門学校となり現在に至ったものです。したがって、電子情報通信関連教育に特徴を持った長い歴史を有しています。

これまでの歴史と伝統の下に、高松キャンパスでは創造的「ものづくり」の領域で活躍できる技術者を育成するために、本科に、機械工学科、電気情報工学科、機械電子工学科、建設環境工学科の創造基礎工学系 4 学科が、専攻科に創造工学専攻を設置しました。また、詫間キャンパスでは先端的「電子情報通信」の領域で活躍できる技

術者の育成に、より集中した資源の投下を実施することにしており、本科に、通信ネットワーク工学科、電子システム工学科、情報工学科の電子情報通信工学系 3 学科が、専攻科に電子情報通信工学専攻を設置しました。さらに、地域連携をより強化するための組織として、詫間キャンパスに地域人材開発本部を置き、その下にみらい技術共同教育センター（詫間キャンパス）と、地域イノベーションセンター（高松キャンパス）を組織化して、この 2 つのセンターによって、地域小中学生の理数科教育の増進と人材の確保、ならびに地元企業等への長期インターンシップの実施や、共同教育、共同研究を積極的に進めることにしています。

これまで高松高専と詫間電波高専は同県内の 2 つの高専として、それぞれ独立して切磋琢磨してきました。しかしながら、これからは一つの高専として活動することが求められ、今後の香川高専の最も重要な課題です。相互にキャンパスが離れていることから、教職員の交流を始め課外活動等で両キャンパスの学生が一つのクラブとして活動することは至難です。今すぐに一体化は難しくとも、両キャンパスの教職員や学生の相互交流を機会があるごとに進め、共通事業の遂行によって相互の絆を深めていくように努め、新しい香川高専の歴史と伝統を刻んでいきたいと考えています。

日本学術会議中国・四国地区の会員・連携会員の各位をはじめ、関係の皆様方のご理解とご支援・ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

## 社会学と社会調査

日本学術会議中国・四国地区会議 運営協議会委員

(山口大学人文学部 教授)

三浦 典子

社会に関する実証的科学として創設された社会学にとって、仮説を検証するために社会調査は不可欠である。社会調査には、俗に言うアンケート調査のような統計的方法と典型的な事例に対して集約的に調査する質的方法とがある。いずれの調査の方法も、それほど簡単なものではない。それなりの技法を学ばなければならない。

今日のような情報化社会においては、情報を収集し、情報を加工し、情報を発信することそのものが、重要な仕事として成り立ち、調査を専門とした機関や会社があつても作られてきている。

しかし、われわれが社会学を学び始めた頃は、そのような専門機関はなく、世論調査を必要とする新聞社や放送局から、社会学の学生は調査の作法を学んでいると見なされていたのか、面接によるアンケート調査の依頼がよく来ていた。調査のアルバイトができる社会学の学生は、その意味で、他の研究室の学生からうらやましがられていた。

統計的調査を実施した後は、調査データの集計をしなければならない。コンピューターが身近に登場するまでは、一人の調査対象者の回答を一枚のカードに記入し、カードを回答ごとにより分けたり、周囲に穴の開いた統計用のカードを回答ごとにパンチで穴を開け、ソーサーを通してふるい落とししたりして、その数を手で数える作業が待っていた。

さらに、数え上げられた数が全体に占める比率の計算は、紙に書いて計算したり、計算尺や手回しの計算機を使ってやらねばならず、ずいぶんと時間を要したものである。

今では子供のおもちゃにもならない四則のできる卓上計算機の登場は、社会学者にとっては、研究のスピードを格段に上げる夢のような道具で、科学研究費が獲得できると、まず卓上計算機を購入した。出始めの計算機は 10 万円を超える高価なものであった。山口大学経済学部の商品資料館に、その当時の計算機が展示されているのを見て、時代の変化を感じる。

私の学んだ大学では、私の卒業間際に、大学構内の建設中の建物に米軍の戦闘機が墜落し、大学をあげて米軍基地反対のデモ行進を行うなど騒然とした。その建物が、大型計算機センターであったことが、情報化社会のもたらす諸問題を考えさせる象徴にも思えた。よい意味でも、悪い意味でも、新しい時代の幕開けであった。

当時のコンピューターは、ひとつの建物を要するほどのものであったが、現在では手に乗るほどの大きさにまでなり、統計用のソフトも出回り、データ処理は簡単にできるようになった。その結果、研究目的や行政上の目的で行うものや、世論調査やマーケティングのために行うもののみならず、おびただしい数の調査が行われるようになってきた。社会調査が氾濫していく中で、方法上問題のある調査が行われ、調査結果の信頼度は低下し、調査倫理をわきまえないような調査が社会問題になってきた。

このような事態を改善するために、また、きちんとした社会調査が担える人材を育成していくために、2003 年 11 月に、日本社会学会、日本行動計量学会、日本教育社会学会によって、「社会調査士資格認定機構」が創設された。認定機構では、社会調査に必要な基礎的な知識や技能を身につけていくための「社会調査士標準カリキュラム」を設定し、カリキュラムに基づいた科目を取得した学生に「社会調査士資格」を、より高度の専門知識や技能に加え、社会調査の企画設計から報告書作成までの科目を取

得した大学院生に「専門社会調査士資格」を認定してきた。社会調査士資格制度が確立される以前に、専門的に社会調査を行ってきたものに対しては、暫定的に、論文審査による専門社会調査士の資格を認定してきた。

この認定機構は2008年12月に、母体となった学会から自立して、「一般社団法人 社会調査協会」として、新しいスタートを切った。2009年までに累計して、7,749名の社会調査士、1,692名の専門社会調査士が誕生した。社会調査を専門的にできる人材を育成する制度は整ってきたが、これらの資格を持った人材をどのようにして社会に送り出していくか、資格制度の認知度をいかに高めるかが、今後の大きな課題である。

日本学術会議社会学委員会「社会調査分科会」においては、今日、国勢調査のような政府が実施する調査においてさえ、調査拒否が増加して回収率が低下し、調査結果の質が問われるようになっており、個人情報保護条例の施行によって調査対象者の抽出が困難になったり、技術や知識がなくても簡単にできる収入の良いアルバイトが多くあり、一定の資質を備えた調査員の確保や維持も困難になってきているなど、次第に悪化していく調査環境について、さまざまな議論をしてきている。

また、このような苦労のもとに実施された調査データが、日本では調査実施者の手元に秘蔵される傾向にあり、これらをデータアーカイブとして公開する方向を模索している。

欧米においては1960年代から設置されてきているデータライブラリーのようなものをめざして、まず、個別の学術団体が公開しているデータベースについて、形式を統一して組織化することから始め、データ利用の効率化を図るシステムを構築することが求められている。

また、日本で行われている調査は、当然のことながら日本語で実施されており、そのデータを海外に向けて公開していくことも、社会現象に関する国際的比較研究においては不可欠である。

## 公開学術講演会について

日本学術会議中国・四国地区会議

(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 教授)

運営協議会委員 曾根 三郎

連携会員 市川 哲雄

難病克服に向けた講師自らの人生体験をもとに、「何故、現在の専門を選んだか」、「どのように取り組んでいるか」など、生命科学研究における創造の喜びと魅力を語ってもらい、次世代を担う高校生への進路決定に役立て貰うことを目的として、先端的研究に取り組む徳島大学の教授の方々をお招きし、平成 21 年 7 月 11 日（土）に本学医学部第 2 臨床講堂で公開学術講演会を開催した。

生命科学研究分野に興味を持つ高校生を対象に、参加者は県下の高校生 1 年生、2 年生を中心に定員 240 名をオーバーする 260 余名、および引率教師、金澤一郎日本学術会議会長、中国・四国地区会員・連携会員、青野徳島大学長ほか理事、その他大学関係者などの 300 名近くが参集した。

事業代表者の曾根三郎が進行役を務め、講演会の冒頭に青野敏博徳島大学長の挨拶のあと、6 人の講師（医学系、歯学系、薬学系の教授）に難病克服に向けた自らの人生体験をもとに、現在取り組んでいる生命科学研究における発見の喜びと真理探究の魅力を語ってもらった。

生徒達は、講演者の経験談や生命科学研究の魅力に触れて目を輝かせて傾聴していた。今回、高校生自身が各演者の座長を務め、貴重な経験となった。そして、高校生からは素朴な疑問、核心をつく質問などが相次いだ。高校生にとっては、医学系、歯学系、薬学系の生命科学研究を志望する進路決定の一助になったとのメッセージが寄せられた。本学にとっても、志の高い学生の確保、ひいては将来の優秀な医療人の人材育成につながるものと期待している。

今回の公開学術講演会は、日本学術会議中国・四国会議でも初めての企画であり、それが盛況のうち成功裡に終わったことから、企画・運営面で高い評価を頂いた。

日本の将来を担うべき次世代の活力が大きく低下していると危惧されている昨今、それを吹き飛ばすような高校生の活力を感じた講演会であった。

<講演者と演題名>

- 金澤一郎日本学術会議会長 「不思議な脳の世界」
- 高石喜久教授（薬学部長） 「地球は大きな薬箱-病気と戦う薬学-」
- 玉置俊晃教授（医学部長） 「人は血管より老いる」
- 安友康二教授（免疫学） 「自己の分子で癌を治療する」
- 市川哲雄教授（臨床歯学） 「食べられない苦しみ、食べられる喜び」
- 永廣信治教授（脳外科） 「脳外科医の闘い」



金澤一郎日本学術会議会長による講演の様子



講師の先生方と、座長を務めた高校生と共に

### 会員・連携会員一覧 (中国・四国地区)

#### 【鳥取県】

三野 徹 (農学) 鳥取環境大学教授  
京都大学名誉教授  
岡山大学名誉教授

山下 博樹 (地域研究) 鳥取大学地域学部准教授

#### 【島根県】

陶山 容子 (材料工学) 島根大学教授

#### 【岡山県】

池端 雪浦 (史学) 東京外国語大学名誉教授

梶谷 文彦 (基礎医学) 川崎医科大学副学長・名誉教授  
岡山大学特命教授

公文 裕巳 (臨床医学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科  
泌尿器病態学教授

斎藤 清機 (化学) 放送大学岡山学習センター所長

佐々木 宏子 (心理学・教育学) 鳴門教育大学名誉教授

篠田 純男 (薬学) 岡山理科大学理学部教授  
岡山大学名誉教授

白石 友紀 (農学) 岡山大学大学院自然科学研究科  
教授

高階 秀爾 (史学) 大原美術館館長  
東京大学名誉教授

滝川 正春 (歯学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科/  
歯学部口腔生化学・分子歯科学分野  
教授、歯学部長

○武田 和義 (農学) 岡山大学資源生物科学研究所  
特命教授

中筋 房夫 (農学) 岡山大学名誉教授

中原 忠男 (心理学・教育学) 環太平洋大学学長特別補佐・教授

二宮 正夫 (物理学) 岡山光量子科学研究所長

松本 英明 (農学) 岡山大学名誉教授

森島 恒雄 (臨床医学) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科  
小児医科学教授

渡邊 達夫 (歯学) 朝日医療専門学校岡山校校長

#### 【広島県】

有本 章 (心理学・教育学) 比治山大学高等教育研究所所長、  
現代文化学部教授  
広島大学名誉教授

岩田 穆 (電気電子工学) 広島大学大学院先端物質科学研究科  
特任教授

太田 茂 (薬学) 広島大学大学院医歯薬学総合研究科  
教授  
広島大学薬学部長

岡崎 正之 (歯学) 広島大学大学院医歯薬学総合研究科  
教授

岡本 祐子 (心理学・教育学) 広島大学大学院教育学研究科教授

奥村 晃史 (地球惑星科学) 広島大学大学院文学研究科教授

神谷 研二 (基礎医学) 広島大学  
原爆放射線医科学研究所長・教授  
県立広島大学保健福祉学部教授

住居 広士 (社会学) 福山大学生命工学部  
附属内海生物資源研究所教授

谷口 順彦 (食料科学) 福山大学名誉教授  
県立広島大学理事

利島 保 (心理学・教育学) 広島大学大学院法務研究科教授

平野 敏彦 (法学) 広島経済大学学長

前川 功一 (経済学) 広島経済大学学長

松田 文子 (心理学・教育学) 福山大学人間文化学部教授

三浦 道子 (電気電子工学) 広島大学大学院先端物質科学研究科  
教授

山脇 成人 (臨床医学) 広島大学大学院医歯薬学総合研究科  
精神神経医学教授

横尾 京子 (健康・生活科学) 広島大学大学院保健学研究科教授  
(副研究科長)

吉里 勝利 (基礎生物学) 広島大学名誉教授  
大阪市立大学医学研究科客員教授  
(株)フェニックスバイオ学術顧問

#### 【山口県】

小川 全夫 (社会学) 山口県立大学大学院 教授

加藤 紘 (臨床医学) 山口大学名誉教授

早川 誠而 (農学) 山口大学名誉教授

松崎 益徳 (臨床医学) 山口大学大学院医学系研究科  
器官病態内科学教授

三浦 典子 (社会学) 山口大学人文学部教授

#### 【徳島県】

市川 哲雄 (歯学) 徳島大学  
ヘルスバイオサイエンス研究部教授

曾根 三郎 (臨床医学) 徳島大学大学院  
ヘルスバイオサイエンス研究部教授

#### 【香川県】

一井 眞比古 (農学) 香川大学学長

井原 理代 (経営学) 香川大学大学院地域マネジメント研究科  
教授、研究科長

○嘉門 雅史 (土工学・建築学) 香川高等専門学校校長

神江 伸介 (政治学) 香川大学法学部教授

實成 文彦 (健康・生活科学) 山陽学園大学副学長

#### 【愛媛県】

佐藤 晃一 (食料科学) ARU(地域環境工学)研究所  
(愛媛大学名誉教授、農学博士、  
技術士(農学部門))

橘 燦郎 (食料科学) 愛媛大学農学部教授

田邊 信介 (環境学) 愛媛大学沿岸環境科学研究センター  
教授

野並 浩 (農学) 愛媛大学農学部教授

○山内 皓平 (食料科学) 愛媛大学社会連携推進機構教授  
南予水産研究センター長

#### 【高知県】

赤澤 威 (基礎生物学) 高知工科大学・総合研究所 教授

飯國 芳明 (農学) 高知大学大学院  
黒潮圏海洋科学研究科教授

宇高 恵子 (基礎医学) 高知大学医学部免疫学教室教授

岡村 甫 (土工学・建築学) 高知工科大学理事長

○佐久間 健人 (材料工学) 高知工科大学副理事長・学長

野嶋 佐由美 (健康生活科学) 高知女子大学看護学部長

藤田 正憲 (環境学) 高知工業高等専門学校校長

#### 【その他】

菊池 章 (基礎医学) 大阪大学大学院医学系研究科  
分子病態生化学教授

窪田 幸子 (地域研究) 神戸大学大学院国際文化学研究科  
教授

※○印は会員

※一部の連携会員の専門分野及び現職名は選考時(平成 20 年 3 月)のものです。

## 地区会議事務局からのお知らせ

### 1 平成 21 年度日本学術会議中国・四国地区会議事業報告

事業名・期日(時期)・場所等	事業内容
第 1 回地区会議運営協議会 平成 21 年 7 月 11 日(土) 12:00～13:30 徳島大学(蔵本キャンパス)	<b>【協議事項】</b> ①平成 21 年度事業計画(案)について ②平成 22 年度公開学術講演会等について
第 1 回科学者懇談会 平成 21 年 7 月 11 日(土) 13:30～15:00 徳島大学(蔵本キャンパス)	<b>【概要】</b> ①日本学術会議報告 ②徳島大学の取り組み～「産学連携と国際化」 ③総合討論
第 1 回公開学術講演会 平成 21 年 7 月 11 日(土) 15:00～17:30 徳島大学 (蔵本キャンパス第二臨床講堂)	<b>【テーマ】</b> 「医学と社会の接点」 ～難病克服に立ち向かう生命科学の創造と魅力～ <b>【講演】</b> 「不思議な脳の世界」 金澤 一郎(日本学術会議会長) 「地球は大きな薬箱ー病気と戦う薬学ー」 高石 喜久(徳島大学教授、薬学部長) 「人は血管より老いる」 玉置 俊晃(徳島大学教授、医学部長) 「自己の分子で癌を治療する」 安友 康二(徳島大学教授) 「食べられない苦しみ、食べられる喜び」 市川 哲雄(徳島大学教授) 「脳外科医の闘い」 永廣 信治(徳島大学教授)
第 2 回地区会議運営協議会 平成 22 年 3 月 8 日(月) 13:30～15:00 広島大学医学部広仁会館(広島市)	<b>【協議事項】</b> ①平成 22 年度事業計画について ②平成 22 年度公開学術講演会及び科学者懇談会の開催について ③平成 22 年度地区ニュースについて
地区ニュース発行	中国四国地区の日本学術会議会員・連携会員及び教育研究機関等へ配布

2 平成 22 年度公開学術講演会について

日 時：平成 22 年 11 月 27 日（土）

場 所：山口大学医学部（宇部市）

テーマ：「医」「工」の融合による研究成果で地域社会へ貢献

※ 詳細については、決定次第別途ご案内させていただきます。

---

原稿募集

地区ニュースは科学者の方々と日本学術会議中国・四国地区会議との連繫を図ることを主な目的としております。

日本学術会議あるいは教育，研究，学術等に関する率直なご意見，ご希望等をお寄せくださいますようお願い致します。

お 願 い

回覧等により，多くの方々に読んで頂きますよう，ご配慮願います。

日本学術会議中国・四国地区会議事務局  
〒739-8524 東広島市鏡山一丁目1番1号  
(広島大学学術室学術企画グループ内)  
TEL : 082-424-4336 FAX : 082-424-6990